

八 心徹齋道楽皆宗俊書状（栃木県立博物館所蔵「那須文書」）

心徹齋道楽（皆川俊宗）、烏山御館の那須資胤に、蘆名盛氏が白川義親と盟約を締結したこと、及び佐竹義重が赤館を攻めたが会津衆の助力で佐竹氏が敗れたことなどを報じる。

先日聊及御返答候旨趣、御悦喜之段重而貴札、殊更以御使僧条々御懇切蒙仰候、旁以畏入令存候、然者去五日盛氏（蘆名）、義親江被遂御対面、盡未来之儀被仰堅之由、真実以目出度御簡要至極候、将又義重去七日向赤館被相動候処、会衆被懸合佐衆数輩被討取、手負無際限被仕出候之上、其夜中敗軍之由、度々御利運、弥以御本望之至候、猶々清兵・千美御内証之透、始中終被申越候之際、愚意をも速彼御方憑入候、定而可有御心得候、万吉重々恐々謹言、

心徹齋

（元龜二年）
九月廿四日

（皆川俊宗）
道楽（花押）

烏山（那須資胤）

御館

【読み下し文】

先日聊いささか御返答に及び候つる旨趣、御悦喜の段重ねて貴札、殊更御使僧をもつて条々御懇切に仰せを蒙り候いきこうむ。かたがたもつて畏れ入り存ぜしめ候。しからば、去る五日盛氏、義親へ御対面を遂げられ、尽未来の儀、仰せ堅められるの由、真実もつて目出度御簡要至極に候。将又義重去る七日赤館に向け相動き候はたつる処、会衆懸け合われ、佐衆数輩討ち取られ、手負際限なく仕出され候つるの上、其の夜中敗軍の由、度々の御利運、いよいよもつて本望の至りに候。猶々清兵・千美の御内証の透り、始中終申し越され候の際、愚意をも速やかに彼の御方に憑たみ入り候。定めて御心得有るべく候。万吉重々恐々謹言。

【補注】

和歌山県の高野山の塔頭清浄心院に残されている「下野国供養帳」には、天正元年（一五七三）八月十一日付けで追善の日牌供養を依頼した「下野皆川心徹齋之法名」「傑岑文勝居士」の名が記されている（『鹿沼市史』資料編古代・中世所収）。「傑岑文勝居士」は皆川氏関係系図の伝承によれば、皆川俊宗の法名と記されている。このことを考慮すると、心徹齋道楽は皆川俊宗の齋号と言えらる。